

平成八年十一月十日発行(毎月一回十日発行)第十五卷第十二号十一月号
昭和五十八年一月十八日第三種郵便物認可

日本語学

11月号

1996 VOL. 15

特集 電子社会のコミュニケーション

- 電子メールの光と影……………萩野綱男
 電子メールを媒介とした社会的行為三考……………木村忠正
 パソコン通信フォーラムのコミュニケーション・テーマ……………伊藤雅光
 CMCにおけるコミュニケーション行動……………川浦康至
 個人ホームページの力、電子メールの力……………野村一夫
 —社会学専門ウェブ SOCIUS の経験から—
 電子メディア時代の人間関係……………野島久雄
 インターネットで変わる社会生活……………三上俊治
 インターネットは電子図書館か?……………齊藤康己
 鷲坂光一
 インターネット時代の英語事情……………本名信行
 インターネットとパソコン通信はどう使われているか……………橋元良明
 —電子メール利用を中心として—

《連載》

- 連体即連用? 13
 変化動詞文 その二……………奥津敬一郎

明治書院

電子メールを媒介とした社会的行為空間

木村 忠正

はじめに

今から振り返ると奇妙にすら思えるが、一九九〇年代はじめまで「パソコン」や「パソコン通（パソコン通信）」は一部の専門家やマニアのものであり、それらの言葉には「おたく」「暗い」といったイメージが付きまとつていたように思う。それが一九九五年後半から「ウィンドウズ」「インターネット」「サイバースペース」などという語が急速に普及し、名刺に電子メール・アドレスやURLといった記号を見出すことが容易になってきた。こうした現象は、これまで「ポストモダニズム」「ポストインダストリアル」など、「ポスト」としてしか自己を規定できなかった社会文化的に大きな変革の行方が、何らかの意味あい「ネットワーク社会」なのではないかと

いう示唆を与えているようにも思える。

事実、デジタル技術・ネットワーク技術の革新により、コンピュータネットワークは人類にとって新たな活動空間である。「サイバースペース」を急速に構築しつつあり、様々なCMC(Computer Mediated Communication: コンピュータ媒介コミュニケーション)が日常生活の一部として実践されつつある。そうした中で電子メールを媒介とするコミュニケーションは、その社会生活における重要性からみてCMCの典型例といつてよいだろう。電子メールは従来の郵便に比べると世界中どこでも数分から数時間で相手に届くし、一方、電話に比べていつでも発信することができ相手も自分の都合に応じて読むことができる。しかも電子化されているので保存や引用がしやすい。そこでこの小論では、筆者が現在行っているフィール

ドリサーチのデータに基づきながら、電子メールにより媒介される行為空間を分析単位とし、「社会的分散認知」の観点からその空間の特質を議論することにした。

社会的行為を媒介する道具としての言語

言語学あるいは言語哲学の分野においてはオーステイン、サールらにはじまる言語行為論（例えば Searle ed. 1980）、社会学的文脈においてはガーフィンケルにはじまるエスノメソドロジー、談話分析（例えば Garfinkel 1985）など、「言語」の研究をソシユールの意味での「ラング」の研究やチョムスキー的な意味での「文法」の研究ではなく、社会的行為として研究する分野がすでにサブディシプリンとして確立している。

一方、（認知）心理学の文脈においては一九六〇年代の「認知革命」以降「情報処理モデル」が規範となった。そこでは世界と個体とが明確に区別された上で、個体内の表象、認知のみが研究の対象とされ、「言語」の研究や「カテゴリー」の研究もそうした「頭の中の情報処理モデル」に基づいていたのである。しかし広く知られているように一九八〇年代こうした「認知主義」の限界が指摘されるようになってきた。理論的にはギブソンの生態学的心理学（Gibson 1979）、ヴィゴツキーらのソビエト歴史文化主義心理学（Vygotsky 1987）、方法論的には実験心理学への批判から、私たちの「心」や「認知」は個体の「頭の中」に還元しきれるものではなく、具体的な状

況と切り離すことのできない他者や事物との協同関係に埋め込まれたものであるとの認識、実験心理学は「実験室」という特殊な状況下における認知のあり方を研究していたに過ぎないのではないかという反省が生じ、「状況認知」「分散認知」への関心が高まってきている（e.g. Salomon 1993, Chalkin and Lave eds. 1993, Suchman 1987）。

例えばカーシュ（Kirs 1995）は、台所、スーパーマーケット、仕事場などにおける日常生活の観察から、人々がとりまく環境を構造化することによって、推論、記憶、知覚などをいかにその環境の中に道具として埋め込み、簡略化しているかを示している。キッチンでレギュラーコーヒーを一杯いれることを考えてみても、自分の家であれば私たちは、どこにコーヒー、やかん、カップがあるかを考える必要などないし、きれいなカップがないときにはどれか洗って布巾やタオルで拭くことも「自然に」行うだろう。ここで「メンタルマップ」や「スクリプト」などの表象的概念によって「頭の中の知識」へと議論を引き戻すことも可能ではあるが、同時に、私たちは身体をもった活動体としてたえず環境と接し、様々な認知活動（この場合では、やかんを検索し同定するといった作業や一杯のコーヒーをいれるという一連の手続き的知識）をあらかじめ環境に埋め込み、それ自体を組織化しているのとらえ、その活動のあり方を分析単位とすることもまた可能であり意味あることだろう。

筆者の専門である文化人類学においては、こうした意味での「社会的分散認知」に関する研究が、明確な意識のあるなしにかかわらず、数多くなされてきたといつてよいだろう。例えば、航海術において星や島などがどのように「目印」として利用され、いかに環境が思考にとつて容易となるように組織立てられているか (Gladwin 1970) や、戦艦における人・道具の配置と分有された知識がいかに互いに機能して航海を成立させているか (Huchins 1993) などの研究が、いわゆる「認知人類学」の領域で行われてきたし、儀礼における象徴の利用のされかた、儀礼的空間がモノ・人・行為・それぞれの配置を通していかに多層的な意味づけをされているかを描出する試み (Turner 1970) や、右と左に見られる身体を媒介とした象徴的分類の研究 (Needham 1979) のような「象徴論」も「社会的分散認知」研究といえ、歴史文化的心理学アプローチと密接な関係にある (Cole and Engstrom 1993)。

このような社会的分散認知のモデルから考えてみると、「こ」とば」というのはそれ自身が様々な関連性の網の目を埋め込んだものであり、また様々な物理的媒体（音）の場合でも、対面した二人の場合は空気だけが、拡声器や、電気信号に置き換えられた上で A・M・D・M 波などにのせられたり、CD といったパッケージメディアに記録された後に再生されたりする）を通して流通し、環境あるいは経験を社会文化的に組織立てる最も重要な「道具」の一つである。

したがってこうした「分散認知」への関心の背景に、様々な CMC (Computer Mediated Communication 「コンピュータ媒介コミュニケーション」) の発達が関与しているとしても何ら不思議ではない。「マスメディア」のように一方向的なメディアの場合には「記憶」「想起」「思考」などの問題は生じにくかったが、デジタル情報を処理、蓄積、取り出し、加工する様々な装置が利用されるようになり、さらにネットワークにより時間・空間概念が変質するにしたがって、CMC により実現される「認知活動」を個体に還元することが困難になってきた。

例えば電子メールには、システムによつて、送信したメールを相手が見たかどうか、また、見たとするといつ見たのかといった情報を与えてくれる「ヒストリー」という機能がある。次の表 1 は、筆者がフィールドワークを行っている研究所での所内 LAN 用電子メールシステムにおけるものである。これは、ある研究員 (A) が、会議室とよばれる所員全員が見ることのできるフォルダに、ファイル三つを添付してアップしたメールに関するヒストリーの一部を示している。この表によると、八月二二日午後六時三一分に A がメールを送信してから、一分後には別な所員がアクセスし、その日のうちに (A に加えて) 八人の研究所員がこのメールにアクセスしたことがわかる。

電話のように相手の活動にいきなり楔を打つことなく、こ

| 実行内容 | 実行日時 | 実行者 |
|--------|---------------------|-----|
| 作成 | 96. 8. 22 5 : 58 PM | A |
| 送信 | 96. 8. 22 6 : 31 PM | A |
| 読取 | 96. 8. 22 6 : 32 PM | B |
| 読取 | 96. 8. 22 6 : 32 PM | A |
| 転送 | 96. 8. 22 6 : 34 PM | A |
| 読取 | 96. 8. 22 6 : 34 PM | C |
| ファイル保存 | 96. 8. 22 6 : 35 PM | C |
| ファイル保存 | 96. 8. 22 6 : 37 PM | C |
| ファイル保存 | 96. 8. 22 6 : 37 PM | C |
| 返信 | 96. 8. 22 6 : 38 PM | C |
| 読取 | 96. 8. 22 6 : 53 PM | D |
| 読取 | 96. 8. 22 7 : 13 PM | E |
| 読取 | 96. 8. 22 7 : 43 PM | C |
| 読取 | 96. 8. 22 8 : 31 PM | F |
| ファイル保存 | 96. 8. 22 8 : 55 PM | F |
| ファイル保存 | 96. 8. 22 8 : 56 PM | F |
| 読取 | 96. 8. 22 9 : 09 PM | G |
| ファイル保存 | 96. 8. 22 9 : 09 PM | G |
| ファイル保存 | 96. 8. 22 9 : 11 PM | G |
| ファイル保存 | 96. 8. 22 9 : 11 PM | G |
| 読取 | 96. 8. 22 9 : 33 PM | H |
| 読取 | 96. 8. 22 9 : 46 PM | I |
| 読取 | 96. 8. 23 7 : 54 AM | J |

表1 あるメールの「ヒストリー」

ここで紹介する研究は、ある日本の大学の社会科学系研究所で一九九六年五月から行っている調査に基づく。この研究所は研究員が二〇名あまり(全員男性)、常勤アシスタントが一〇名強(全員女性)、様々な業務や研究を手伝う非常勤のアルバイトが一五名程度といった規模の組織である。研究活動は個々の研究員自身が行

れだけの流通の速度をもつて多数の人間の活動が相互に関与し合うことになることそれ自体、興味深いものであるが、それは後述することにし、ここでは次の点に着目したい。実はこのケースでAは自宅から研究所のLANにアクセスしファイルを送付しており、C(アシスタントの女性)に添付ファイルをカラープリンターでプリントアウトしておくよう頼んでいるのである。Aはヒストリーをチェックすることで、誰がいつ見て、ファイルを保存したのが誰であるのかを把握することが出来る。ヒストリーは、Cが添付ファイルを保存(つまり

ダウンロード)したことをCには直接問い合わせることなくAが確認できるようにしている。つまりこの「ヒストリー」という機能は、これまで直接聞くことで確認するかまた、推測しかできなかった他者の(自分の発信したメールへの)行為を「記憶」し、必要に応じて「想起」することを可能にするものである。そして電子メールは、CがAの自宅で作業したファイルを二〜三分のちに研究所のカラープリンターでプリントアウトするといった、複数の個体による行為を媒介し相互に組み合わせられた活動システムを生み出している。

リサーチメソッド

うものもあるが、プロジェクトを中心として研究会などを積極的に組織し、報告書や書籍などのアウトプットを次々と作成する活動もかなりの割合を占める。従って、日常の連絡や情報交換、人員の組織化は担当プロジェクトを中心に行われる。

組織としては、研究部門、総務部門、ネットワーク部門に大別される。この研究所は、ネットワーク化に積極的に取り組んでおり、所内ネットワークを維持・運営する部門も内部に持っている。

今回の調査は大きく二つに分かれる。一つは常勤アシスタントの女性たちを対象とした調査で七名が協力してくれている(ただし一名は退職したため現在は六名)。具体的には次の四つを各アシスタントにお願いした(ただしタスクによっては参加していないアシスタントもいる)。

- (1) カード分類…二〇人あまりの研究員について、その顔写真を小さなカードにし、それをどのような基準でもよいかから分類してもらった。全員をその基準で分類し尽くす必要もないし、一つの集合が一人からなるものでもよい。
- (2) センテンス・フレーム・タスク…〇〇〇は、私の直属の上司である」といったセンテンス・フレームを用いたレイティング作業。研究員の名前を空所に補い、その文章に対する判断を、「強く同意する」「同意する」「どちらかといえ

ば同意する」「どちらかといえは否定する」「否定する」「強く否定する」の六段階で判断してもらった。

- (3) 「ファーストクラス」でのメールのサンプルを一人当たり一〇〜二〇通見せてもらう。合計一〇七通のメールが現在収集されている。

- (4) フォーマットを定めずに自由に電子メールなどに関して話してもらうインタビューセッション。

この四つの調査のうちはじめの二つは、アシスタントの女性たちが、研究員たちを認知的にどのように構造化しているのか、研究員たちとの関係について権力作用の面からどのような心理的距離・認知空間を形成しているのかを探ろうとするものである。(2)のセンテンス・フレームは、(1)のタスクから得られた表現のうちから選んだが、この小論ではこの結果に関してほとんどふれないので詳細は省略する。

一方、ネットワーク部門に協力を依頼し、「ファーストクラス」でのメールのトラフィックを、研究所全体および研究協力してくれた七人のアシスタントについて調べた。「ファーストクラス」というのは、基本的にある閉ざされたネットワーク(LAN)で使われるために開発された「グループウェア」の一種で、

- (1) フォーラム的な「会議室システム」
- (2) そのグループ内での個人どうしのメールのやりとり

(3) オンライン・チャット(テキストベースでリアルタイムの会話をを行う)といったサービスを提供してくれる。

「会議室システム」の場合、様々な「会議室」とよばれるフォルダが作成される。それぞれの会議室には複数の人がアクセスでき(組織に属する全員またはその一部でも設定可能)、互いにファイルをアップすることで情報を共有することができるのである。そのファイル添付に関しては、様々なタイプのファイルを作成ソフトのファイルとして添付できる。例えばワープロソフトの場合、通常の電子メールにおいてはテキストファイルにするためレイアウトなどフォーマットのほとんどは消えてしまうが、ファーストクラスの場合同じソフトのファイルとして送れるので、相手も同じソフトをもっていればダウンロードしたファイルは送信者の意図したとおりのものとなる。先に「ヒストリー」機能のところでもふれたような、ファイルを送ってカラーでプリントアウトしてもらおうといったこともこうした環境があるからこそ可能となるのである。

さて、ここでは(3)に関するデータはとらず、(1)、(2)に関して、つまり、それぞれが誰にあるいはどの会議室にメールを出したか、誰からメールを受け取ったかのデータを収集した。ただしもちろん、収集データは数量のみとなるようにプログラムしてもらった。また、トラフィック調査は三週間(二日間)行ったが、何らかの影響がでることをおそれたので、トラフィックを調べていることに関してはアシスタントの人た

ちに事前に知らせることをしなかった。

全体のトラフィック

表2は一日あたりのトラフィックを曜日別に示したものである。合計は三週間のトータルを示す。これでわかるように、平日で一日平均二二九九通ものメールが研究所内で行きかっていることになる。常勤スタッフ約三〇名で割ると、一人あたり一日八通程度のメールをやりとりしている計算になる。また、多くの研究員は自宅から所内LANにアクセスが可能なので、土曜・日曜でもメールのやりとりが行われているが、平日に比べると有意に低いレベルにとどまっている。

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 | 合計 |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|------|
| 平均メール数 | 275 | 232 | 214 | 260 | 215 | 79 | 42 | 3261 |

表2 ファーストクラスの曜日別トラフィック

| | 個人間のメール | 会議室への書き込み | 合計 |
|------|---------|-----------|------|
| メール数 | 3261 | 689 | 3950 |
| % | 82.6 | 17.4 | 100 |

表3 ファーストクラスの種類別トラフィック

メールは表3にあるように、個人間のメールと会議室宛のメールとに大別される。ただし同一のメールが、複数の人

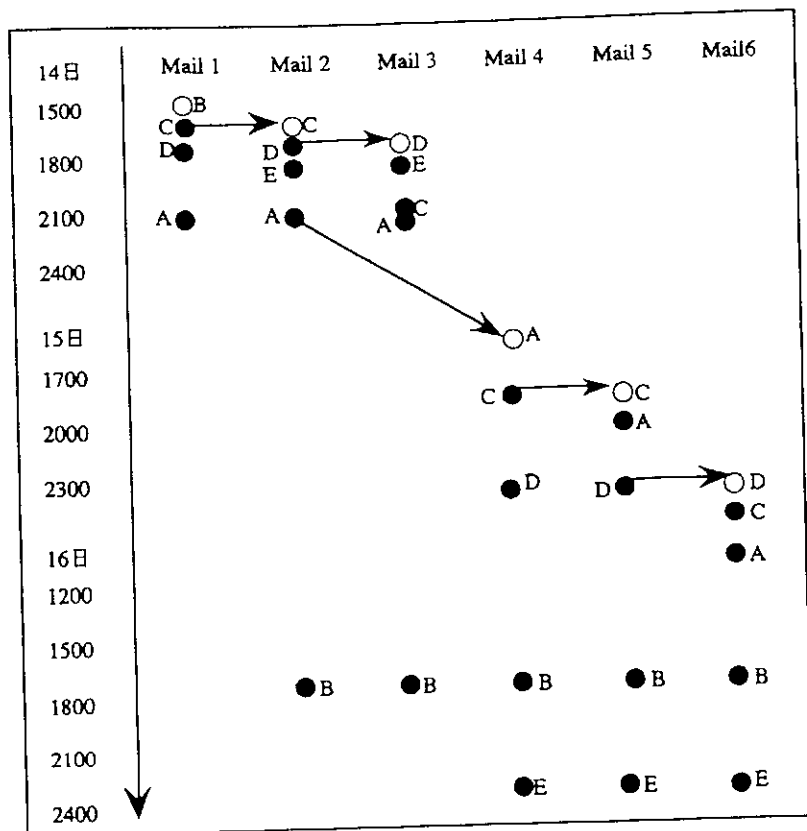


図1 ファーストクラスを媒介としたメールの流通

に送られることも、また、会議室と個人とに同時に同じメールを送ることもできるので、それらは統計上個別にカウントされている。

社会的分散認知とファーストクラス

ファーストクラスという道具がいかに人々を媒介し、一つの活動空間を創出していくかを、収集したメールをもとに具

体的な例を通してみることにしたい。上の図1は、この研究所主催のある研究会が開催される二週間前に、研究会で誰がどのようなことを行うかに関する意見交換がファーストクラスでどのようなに行われたかを図式化したものである。「略「研究会準備について」というタイトルで六通のメールが五人の研究員たちの間を流通した。AからEはこの一連のメールの交換で同報関係にあった人たちで、○は発信を、●は受信を示し、図のMail1からMail6の縦列は、それぞれのメールを誰がいつ発信し、誰がいつ受信したかを表している。↑は起点における受信メールの返信として終点の時点で発信を行ったということである。

まずBが一四日の一五時三分にA、C、D、Eに対して、二週間後に行われる研究会で、A、B、Dがどのような分担で何を発表するか案を示すことから一連の活動は開始された。この五人はそれぞれ自分の専門分野やプロジェクトのことで忙しく、限られた機会にしか全員が集まる機会とはれない状態であった。Cは全体の統括者、Eはロジスティクスの担当者として同報者に含まれている。

送信から一時間半後の一六時三分にCがまずメールを受信し、すぐに了解の返信をだした。ついでDがアクセスしたときには、Bの提案だけでなくCの了解も送信されており、Dはその二つのメールを見て、やはりすぐに了解のメールを送った。

Eがアクセスしたときにはしたがって、Dの返信まで含め三つのメールを受信することとなった。この三つのメールからはE自身がすぐに動く話ではないことがわかったため、Eは二日後の一六日になるまでアクセスを行わなかった。

一方発表者に指定されたAは、第一から第三のメールを一日の二二時ごろに読みとったが、返信は翌一五日の一七時ごろに行っている。この間Aはどうしたのだろうか？ Bのメール(Mail)のヒストリーを見ると、Aは一四日二二時五分に受信し、二二時五三分に「転送」を行っている。

Aは、研究所長が研究会用の資料を集める補助をするつもりでいたところ、分担して発表することとなったという。そこで、個人的な学会での発表というよりは、むしろ研究所全体の活動を代表する側面が強かったことと期間が短いことから、Aは複数のパートタイムの学生に資料収集などを分担してもらったこととし、まず二人の学生(PとQ)に転送メールを一四日の二二時五三分に送った。そのうち一人は同じ一四日二二時四八分に受信し、二二時五一分には手伝えるとの返信を行っている。Aは翌一五日の朝一〇時六分にその返信を受信し、一〇時二八分に改めて二人に協力を依頼するメールを送ったのである。

さらにAはある資料のとりまとめを別な学生(R)に依頼しようとしたが、その時、ファーストクラス・インターネットメール・電話の三種類を同時に利用した。Rの作業はロー

データをまとめて表にするもので、その分析をPに依頼しようとしたためRをいち早く捕捉する必要があったのである。Aの発言ではないが、フィールドリサーチにおけるインタビューで、あるインフォーマントは、確実に知らせなければならぬ情報であればあるほど、電子メールだけではなくファクス・電話でも確認を行うようにしていると述べている。ファクス・電話・電子メールと媒体毎の特性が異なるが、何らかの情報を確認するということはそれらの媒体いずれによっても実現可能であり、「冗長性 (redundancy) は情報の確実性をもたらすことになる。AはRから夕方電話とインターネットメールで返事をもらい、それをうけて、図1にあるように一五日の夕方に返信のメールを書いたのであった。

これにより研究会の準備態勢はできあがり、統括者であるCは全員が実際に集まって打ち合わせる日時を伝え(Mail)、Dはそれに対する返信を行って(Mail)一連の準備の打ち合わせは完了した。

この例ではまず、電子メールによるコミュニケーションが、何かを決めるために各自が自分の感想や意見を出し合うよりも、何か明確な案が提示されそれに対する賛否を決めることに適しているという経験的な観察に合致している面があるように思われる。Bが自ら提案を行い、その後二日間アクセスしなかったのは、自分のメールがさらに意見を出し合う方向に向かうよりは、関係者各自が提案を確認し了解すると思っ

ていたからであろう。しかし、だからといってすべての行動を「Bの意図」に還元するわけにはいかない。図1に示したメールの流通は、メールの内容だけではなく、いつ返信するか、いつアクセスするか、またはしないか、誰に転送するかなど、メールに媒介された行為そのものが、そのメールの関与する人々が協同作業していく際の役割を示しており、各自が何を行い、どう取り組むのかという独自のパースペクティブを持ち込みながら、メールに媒介されることによって一つの社会的活動を形成している。

紙幅の関係上割愛するが、その後Aは、P、Q、Rさらにもう一人学生の協力を得て研究会資料と発表プレゼンテーションを作り上げていった。その過程は図1以上に興味深いもので、最終的な資料とプレゼンテーションはAがまとめたものであるが、それを構成するデータや素材は、五人の間を流通した二日間で二二あまりのメールにより媒介されており、誰か一人に帰属するものではなかったのである。

外部記憶としての電子メールと

「サイバーポリティクス」

前節は研究員を中心にしてみたが、インフォーマントとして調査に積極的に協力してくれているアシスタントの人たちの行為は、電子メールの持つ別な空間形成力を示している。

表4は、七人のインフォーマントたちのメールの概要を示

| | 個人宛メール | | 会議室 | 合計 | 直属上司 | | | 上司 | | |
|---|--------|------|-----|-----|------|------|-----|----|------|-----|
| | 送信合計 | 受信合計 | - | - | To | From | 認識数 | To | From | 認識数 |
| a | 64 | 50 | 16 | 130 | 10 | 4 | 1 | 10 | 4 | 2 |
| b | 19 | 53 | 5 | 77 | 7 | 10 | 1 | 9 | 31 | 8 |
| c | 192 | 97 | 8 | 297 | 39 | 11 | 2 | 61 | 26 | 13 |
| d | 104 | 30 | 8 | 142 | 20 | 9 | 2 | - | - | - |
| e | 120 | 131 | 29 | 280 | 17 | 35 | 3 | 31 | 42 | 11 |
| f | 182 | 248 | 25 | 455 | 37 | 83 | 2 | 49 | 99 | 4 |
| g | 69 | 54 | 26 | 149 | 22 | 10 | 1 | 22 | 10 | 1 |

表4 インフォーマント各自のメール数

し、表5はインフォーマントどうしのメールのトラフィックをまとめたものである。多くのインフォーマントはこの研究所で初めて電子メールを実際に自分で使うことになったという。今回の調査で予想外だったのは、ファーストクラスのメールが、研究補佐のアシスタントたちどうしよりもむしろ、いわゆる「上司」との事務連絡に用いられる頻度が高い点だった。彼女たちはインターネット

| | | 受信者 | | | | | | | 女性 会議室 |
|-----|---|-----|---|---|---|----|----|---|-----------|
| | | a | b | c | d | e | f | g | |
| 送信者 | a | - | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 1 | 9 |
| | b | 0 | - | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | c | 5 | 3 | 1 | 3 | 8 | 11 | 5 | 0 |
| | d | 1 | 2 | 3 | - | 12 | 0 | 0 | 1 |
| | e | 0 | 7 | 6 | 3 | - | 4 | 0 | 12 |
| | f | 4 | 0 | 6 | 0 | 3 | - | 0 | 2 |
| | g | 1 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | - | 4 |

表5 インフォーマントどうしのメール数

見が多かった。ファーストクラスに関して、表5を見ればわかるように、この数値が三週間でのトラフィックの合計であることを考えると、インフォーマントどうしのメールのやりとりは、きわめて少ないといえるだろう。それに対し、表4にあるように、「直属上司」あるいは「上司」と

認識している研究員とのメールのやりとりは相当な数に上る（ここでの「直属上司」「上司」は、センチンス・フレーム・クセクの結果による）。

ここで、個別の事情を補足しておきたい。表4で、個人宛メールの送受信がかなり不均衡になっているのは、b、c、dの三人である。bは、慎重にメールを書く人で、書いたのに送らないままにしてあるメールもかなりある。実際、彼女のメールはかなりフォーマルな印象を与える。例えば、

(1)

「インフォーマントfの名字」さん

ご無沙汰してます……ってほどじゃないけど、二階ができてからお見かけすることがめっきり減ってしまいました。今日は「インフォーマントeの名字」さんもお休みでちよつと寂しいナ……
などと思っている間にも、「直属の上司の名字」から次のようなメールが入りました。

「直属の上司からのメールのコピー。データベース構築に関する問い合わせ」

来週、お時間がとれるときに教えていただけないでしょ

うか？ お忙しいところ、すみませんが、宜しく願います。「インフォーマントbの名字」

インフォーマントcは総務部門に属している女性で、伝票などの処理を最終的に一括して扱っている。そのため、催促・問い合わせ等のメールを、多くの所員にだしているので、送信超過状態になっている。彼女のメールはどれも簡潔である。例えば、あるアルバイトの人が提出したアルバイト勤務表に関する問い合わせのやりとりは次のようなものだった。

(2-1)

「バイトの人の名字」さん、

アルバイト勤務表について二点質問があります。

・ 交通費の記載されていない日は、自宅作業ですか。
・ 5/15は、0:00〜3:00、10:00〜24:00で合計二六時間になっていますが、一七時間の間違えではないですか？

至急ご回答下さい。

「インフォーマントcの名字」

(2-2) (バイトの人のインフォーマントcへの返信)

・ 交通費の記載されていない日は、自宅作業ですか。
・ 5/15は、0:00〜3:00、10:00〜24:00で合計二六時間になっていますが、一七時間の間違えではないですか？

(木村注)バイトの人は、メールの一部をコピーし、この部分は黒ではなく、青い字にして、引用であることを明確にしている)

「インフォーマントcの名字」さんのおっしゃるとおりです。

交通費を書いていない日は自宅作業です。時間の方も計算間違いですいませんでした。(二四時間超すというのがそもそも変ですよね)

「バイトの人の名字、但しひらがな」

(2-3) (インフォーマントcのバイトの人への返信)

了解。

「インフォーマントcの名字」

インフォーマントdの場合は、ちょうど調査中に退職することになっていたもので、その業務の引き継ぎでメールを多く出す機会があった(表5にあるように、業務の多くはインフォーマン

ト e に引き継がれることになっていたので、彼女へのメール数が多い。

このように、業務内容や個々の事情により差はあるが、アシスタントの人たちのファーストクラスメールの使い方は予想以上に事務的である。これは、(笑)、(泣)、(怒)、(驚)、(感心)などのアイコン(スマイリー)が使われていないことにも現れている。よく知られているように、アメリカでは「」のように表情を横に倒して表現するのに対して、日本では倒さずに表情を表現するアイコンが考案されている(SATOK89用顔文字辞書(KAODICIZH)まである)。また日本のアイコンが、「冷や汗」の多様性に見られるように、他者との関係における自分の精神状態を表現する傾向が強いのに対し、アメリカでは、「サングラスを掛けている」(☞)、"ウォークマンを聴いている" (☞)、など、自分の物理的状态を相手に伝えるアイコンが豊富にある。

しかし収集した一〇七のメールの中でスマイリーが使われているのは、ネットワークセクションのある男性研究員が使っているものだけだった。インターネットやニフティサーブなどのパソコン通信における電子メールとは異なり、ファーストクラスの場合、フォント、サイズ(九ポイントから七二ポイント)、字体(イタリックや太字、影つき文字など)、色(八色)を変えることが可能で表現力が増すということも確かに大きな一因であると思われるが、こうした事務的傾向を解く鍵は、カード自由分類タスクから得られた次のような経験をフレイ

ミングする枠組み (van Dijk and Kintsch 1983, Tannen 1993) にあるように思われる。

あるインフォーマントは、センテンス・フレーム・タスクで「上司」に分類した研究員を、「物理的距離は近いけれど、自分を守るためにメールを使う。話すよりメールを使う」と、カード分類の際にコメントした。つまり、メールに明確に自分の行ったことや解釈したことを書き、疑問に思ったことを上司に明確に示しておくことで、後になって何かいわれたときに十分反論する道具としてメールを用いようとしているのである。逆に親しい研究員とは、「ほとんどメールはしないで、直接話しをする」という。

実際、一人を除いて他のインフォーマントはファーストクラスのメールをほとんど消去せずにとっている。残る一人もなるべく消そうとはしているというがそれでも半分以上残っていた。つまりファーストクラスは、女性のアシスタントたちに対して「外部記憶」として機能しているのである。複数のインフォーマントは、忘れてしまいそうなことをメモしておくために自分宛のメールを書く場合があると述べた。ファーストクラスにはもちろん自分のメールボックスをはじめ、会議室それぞれについて、本文中の任意の文字列や送信者、発信者、日付などにより検索することが可能であり、「記憶」「想起」をファーストクラスという道具が媒介している。しかもそれは、権力作用が働く関係性の中において女性をエ

ンパワーする機序として社会的行為空間に埋め込まれている
と云ってよい。

更に興味深いことに、分類タスクにおいて、別の二人のインフォーマントは「会話のキャッチボールができそう」という表現を用いて分類を行った。また別のインフォーマントは、「上司にしたくない」のは、「頑固で人の話をきかなそう」な人で、「何とかやっつけていけそう」な人を特徴づけるときに、「親切にわかりやすく教えてくれそう。説明してくれそう」「ざっくばらん。話しやすそう、気兼ねいらぬ」「話しやすい。自分の話を忍耐強くきいてくれそう」といった表現を用いた。

この研究所という組織において、インフォーマントの人たちは、研究員補として活動を支えている人たちである。直属の上司と認識している人は一人か二人でも、様々なプロジェクトの関係から「上司」と認識される人の幅はかなり拡大している(表4)。そうした権力作用が働く人間関係において、彼女たちは無意識のうちに、「会話のキャッチボール」のしやすさを、自らの行動をナビゲートし構造化する原理としており、その原理と現実の人間関係の権力作用が「電子メール」を、「キャッチボール」しづらい「上司」への連絡に使うという行動へ動機づけていると思われる。

一方アシスタントの人たちは、昼食などを一緒にとること
で情報交換を行っている。もちろん、彼女たちはアシスタン

トしかアクセス権のない「美への追求」という会議室を擁っており(表5)での「女性会議室」という項目がそれ)、そこはかなり活発な会議室であるが、それはアシスタントの人たちがBBS的な意味あい
で情報を共有するためのもので、次のメールに見られるように「上司への電子メール」とは大きく異なる。

(3) インフォーマントeの女性会議室への書き込み

「タイトル」弱音を吐く

もうダイエツトやめようかなあ。ソフトダイエツトってことで、食べすぎなきやいってことにしてしまおうかなあ……だつてさあ、よくよく考えると、あたし食べる
ことが好きなんだよね。つていうか、好きな食べ物
いっぱいあつて、それをやめるつて結構つらいかも。

結 語

この小論において筆者は、まず第一に「電子メール」をはじめとする電子メディアが、道具として人々の活動を媒介し「社会的分散認知」システムを創出するあり方を検討した。ファーストクラスというグループウェアにおける電子メールは、新たな「記憶」「想起」「思考」の媒体を提供すると同時に、個々の活動を従来の時間や空間の拘束からかなり自由に媒介することで、それぞれのペースタイプで活動しながら、互いに結びつきあい一つの行為空間を構成することを可

能にするものであった。

一方、組織内LANにおける「電子メール」は、女性の組織における人間関係を解釈するモデルと現実の権力関係との矛盾を解決するものとして存立している側面があると考えられた。「電子メール」により創出される「サイバーポリテイクス」は、彼女たちにとって積極的な意味をもつものとなつていく。これは男性研究員にとっての意味あいとは相当異なることが予測される。アメリカでは電子メールを数日見ることができない状況はビジネスマンにとって脅威になりつつあるという。自分がサイバーポリテイクスの中で置いてきぼりをつくいはしないか不安を感じるというのだ (Peake 私信)。こうした観察は、CMCに関して、そのメディアがもつ属性の分析はもちろん必要であるが、それが「リアルスペース」での活動と不可分に結びついているものであり、全体的な人間の社会的文化的活動から分析されるべきであることを示唆しているといえるだろう。

参考文献

Chaikin, Seth, and Jean Lave(1993)Understanding Practice: Perspectives on Activity and Context. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
Cole, M, and Y. Engestrom (1993) A cultural-historical approach. In Solomon, ed, 1993:1-46.

<定価は税込>

明治書院 〒101 東京都千代田区神田錦町1-16
☎03(3292)3741 FAX.03(3292)4429

大分方言30年の変容

松田正義 著
日高貢二郎 著
二二〇〇〇円
30年を隔てて、同地点で同じ調査をし、その変容を捉えた画期的研究。問答形式の資料と解説で構成。

方言の現在

小林・藤崎 大西 編
九八〇〇円
現在の方言の位置、崩壊と再生、社会と方言、生活の中の方言をそれぞれ究明。方言研究者必読の書。

現代日本語方言大辞典

平山輝男 ほか編
各三五〇〇〇円
全八巻補巻一
17年に及ぶ実地調査による決定版。共通語から各地の方言形が縦覧でき、発音記号・アクセントも明示。

漢字百科大事典 全二巻

●重版出来！初の漢字・漢語の専門事典！
佐藤嘉代治ほか編
二〇〇〇〇円
▼内容見本品

- Garfinkel, Harold (1985) *Studies in Ethnomethodology*. London: Blackwell Publishers.
- Gibson, J. J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Gladwin, Thomas (1970) *East is a Big Bird*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hutchins, Edwin (1993) Learning to navigate. In Chaiklin and Lave, eds, 1993: 35-63.
- Kirsh, David (1995) "Intelligent use of Space." *Artificial Intelligence* 73 (1995) pp31-68.
- Needham, Rodney (1979) *Symbolic Classification*. NY: Scott Foresman Trade.
- Searle, John R., ed. (1980) *Speech Act*. Boston, MA: Kluwer Academic Publishers.
- Shotter, John (1993) *Cultural Politics of Everyday Life: Social Constructionisms, Rhetoric and Knowing of the Third Kind*. Toronto: University of Toronto Press.
- Solomon, Gavriel ed.(1993)*Distributed Cognition: Psychological and Educational Considerations*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Suchman, Lucy A. (1987) *Plans and Situated Actions: The Problem of Human-Machine Communication*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Tannen, Deborah ed. (1993) *Framing in Discourse*. NY: Oxford University Press.
- Turner, Victor (1970) *Forest of Symbols Aspects of Ndembu Ritual*. NY: Cornell Univ Press.
- van Dijk, T. A. and Kintsch, W. (1983) *Strategies of Discourse Comprehension*. NY: Academic Press.
- Vygotsky, L.S. (1987) [1934] *Thinking and Speech*. NY: Plenum.